

井上宗雄著『中世歌壇と歌人伝の研究』

小林 一彦

迂闊であった。かつて『鎌倉時代歌人伝の研究』（平九、風間書房、以下前著）の刊行時に、この一冊で空白期が埋められ、ただ一人の研究者の手で、院政期から慶長年間に至る「中世」という時代を貫く和歌の歴史的展開の叙述が完成された、とその壮筆を書評に認めたことがあった（国語と国文学（平一〇・六）。前著のあとがきには「とにかく私なりに『中世』の歌壇を通して見て来たので、幾つかの課題が芽生えている。これからはその解明に取組みたい」と自記されていたのだった。はたして、最新の研究動向に目配りを怠らず、その後の論攷二十編（書き下ろされた新稿七編を含む）を核に若干の旧稿を加えて、五百頁を超える大冊が上梓された。衰えを知らぬ研究意欲には、驚嘆するしかない。

本書は三部構成をとる。第一部（歌人伝を中心に）は、前著が六条家は行家、御子左家は阿仏尼までであったことを承け、本書では慶融・為顕・定為・為実ら歌道家や元盛などその周縁歌人の事績が詳細に綴られている。著者は、早稲田中世の会（平一五、三月例会）にて「鎌倉後期における御子左家の歌人たち 付京極家の断絶」の口頭発表を行った際、（藤原為顕について）「拙稿『代集』に関する追記（メモ）」（慶融略年譜）（為実略年譜）（俊言事績）

などの見出しが並ぶ充実した手書きの資料を配付していた。現在も座右に備え大切に保存している研究者は少なくないであろう。

今回、それらがすべて新稿としてまとめ直され活字化された。『為氏卿記』に見える「亀」が為実の幼名らしいこと、『実躬卿記』「勘仲記」により為言は初名為忠と称したこと等々、奥書や古記録類の丹念な読み裏打ちされた叙述はあいかかわらず手堅い。『冷泉家古文書』所収の書状や冷泉家時雨亭文庫蔵本と傍卷である高松宮旧蔵定為筆『袖中抄』紙背書状など、影印刊行された新資料が縦横に活用されていることはいうまでもない。『拾遺集』の室町期写本二本の奥書を分析、傍記から為邦が応永三年六月以降の一年間に号を道庸から光庸に改めたことなども記されている。なお二本を本書では「京都府立図書館本」として記す（そして『中世歌壇史の研究 室町前期』四五頁参照とある）が、現在は二本とも『室町前期』の上梓（昭三六）後に開館した、京都府立総合資料館へと移管され現在に至っている（函架番号も異なり、一本は全テジタル画像で公開されている）。氏の研究歴がいかに長いか、こうした写本の動きからも実感できるであろう。

前後するが、第一部の冒頭では中御門宗家について論じている。書陵部蔵本（残欠本、歌人佚名）の親本にして完本が時雨亭文庫から出現し、『冷泉家時雨亭叢書』の解題を著者が担当したことに因む成稿という。書陵部本は著者や松野陽一氏により宗家の家集かと推定されていた経緯があった。このように冷泉家の秘庫が公開されてから、著者の仮説が実証ないしはより確度を増した事例は少なくない。たとえば国宝手鑑『藻塩草』の一葉が「白葉

集」の恋部ではとの予言（『中世歌壇史の研究 南北朝期』）は、その一葉を切り出した古写本そのものが時雨亭文庫から出現し決着を見ている。当時、「自葉集」は書陵部蔵の孤本（各部冒頭までの残欠本）が残るのみであった。書体・字詰・料紙・寸法などからツレを同定する作業と異なり、物理的にまったく異なる二つの個体を結びつけることは容易ではない。なお、「政範集」も藤原政範の家集ではなく実材母ら平親清の一族と関係があるのでは（あるいは親清二女の家集か）、と著者は推定していたが、天理大学附属図書館蔵政範集が時雨亭文庫から発見された親清四女集・五女集（いずれも書陵部本の親本）と、複数の合点の様相や全体の面影に至るまで、写本レベルで（固体として）よく似ていることに思わず声をあげた人もいたのではないか。資料調査の豊富な経験と歌壇史研究の蓄積から導かれた氏の仮説が、冷泉家の秘蹟によって次々に真実と証明されたり蓋然性が増していくのは「痛快」（不遜な物言いをお許しいただきたい）である。

第七章「藤原盛徳（元盛法師）」では二条派の歌僧元盛をめぐって、國學院大学蔵『後拾遺集』や中院通村日記などの資料を駆使し事績を明らかにする。元盛の費やした労力を想う時、彼がなぜ『作者部類』のような大事業を志したのか、「更清書之」とあるのは師筋からの依頼・命令があったのか、著者自身が記すように、興味は尽きない。近年関心が高まっている勝間田長清『天木和歌抄』およびその師為相との関係なども含め、鎌倉後期から南北朝期にかけての歌道宗匠と周縁の弟子筋による類聚や部類などの編纂活動は、背後の膨大な和歌資料群の存在など追究すべき問題

も多い。このことについて、著者の胸中には何らかの予想や見通しが、おそらくあるのではないだろうか。それらを、もう少し明かしてほしかったと思う。第八章「和歌の家の消長」では、二条家が血統が絶えた後も多くの有能な地下の人々を引付け、その道統を維持拡大せしめる状況を生み出した背景を解き明かす。本意に根ざした温雅な歌風を是とし嫡流的権威を重んずる社会的・文化的底流に基盤を置く行き方が、大きく与っていたと指摘する。「心」の働きを重視し、主体性を厳しく追究しようとした京極派を「閉鎖性の強いエリートの和歌であった」と断じたのは、二条派の大衆路線を際立たせ、至言である。付章の「東常縁と素暹と——歌人として——」では『実隆公記』の表記「藤常縁」に着目し、実隆には宗祇の語る「トウ」が東氏とは直結せず、宗祇が自己の権威づけのために常縁をことさら称揚したとし、遠祖の素暹が為家賀であった確実な資料が存在しないことから、直ちには信用できないとする。東氏の家譜には不審な記載が多い、という史料批判に裏打ちされた、著者ならではの見解である。現在も、辞典類には素暹が為家女を娶ったことで、「為家説」が東氏に相伝され常縁に至ったと記すものがあり、注意が必要である。

第二部（『中世歌壇の種々相』）は四章および付章「小考三編」から成る。中心をなすはじめの三章では「中世歌集の形態」（一―三）につき詳述している。第一章〈勅撰集〉は主に作者表記と詞書の問題を扱う。「勅撰和歌集の詞書について——主として後拾遺集、新勅撰集の場合——」や「心を詠める」について「再び『心を詠める』について」などは学界でも馴染み深く、本格的な題詠の研

究に端緒を開いた記念碑的な論文である。次章以降（私家集・定数歌）への論の展開もスムーズに流れ、このような収録の仕方があったかと虚を突かれた。昭和の旧稿四編を集めた第一章に対して、第二章以降には最近の論攷十編が並ぶ。勅撰集・私撰集・私家集の三分類が有効でないことは、形態論に照らせば明らかで（前二者はほぼ同じと見て差し支えない）、定数歌を別に立てたところに中世和歌の特殊性を浮き彫りにしようとする著者の意欲がうかがえる。定数歌は規模も十首前後から千首と懸隔が大きく、個人の独詠（私家集的な作）もあれば複数で競作、ないしは続歌のように分担する撰集の如きものもあり、さらに応制百首のように晴儀のものからごく私的なものまで幅広く、中世における私家集（これ自体も部類歌集や日次詠草など一様でない）をどう把握するかという大きな課題とも密接に関わってくる。このあたりを解きほぐし、作品を盛る器（形態）としての「中世の歌集」を和歌史のなかでどのように整理・評価するのか、千首歌という形式の創出・享受は「題詠による量産の要求された中世」では当然と説く著者のなかには、見取り図が描かれているに違いなく、それを大胆に披瀝して欲しかったと思う。しかし著者の叙述はあくまで淡々として禁欲的で、筆は方法論としての私家集系統分類への研究史批判へと向かうのである。補説「伝本分類の用語管見―特に私家集について―」では「おそらく系統という語がよく用いられるのは、伝本調査の結果、系統表を作る操作（系譜法による本文批判）が典範化されたことに影響されているからではなからうか」と説きつつ、「一方、系譜法は万全のものではない、すべてを系統化する

のは難しい」と戒める発言もある。膨大な伝本を調査してきた著者ならではの体験に基づく述べ懐であろう。書評者は近時「冷泉家時雨亭文庫蔵中世私家集系統一覽」（叢書『中世私家集十二』付載）で、中世歌人約八十名の私家集につき伝本分類の状況把握を試みたが、系統・類といった定義や分類法は、研究者各人で曖昧であり、研究史を統合して中世私家集の系統一覽作成は困難なことを痛感した。このところ一系統の私家集の諸本を大量に比較校勘し、現存伝本から系統・類は立てられない、と結論づける研究も散見されるが、私家集研究（特に中世におけるそれ）は転換期に差しかかっているとは言えまいか。冷泉家時雨亭叢書が完結し、資經本・承空本・素寂本・擬定家本等々も含め多くの私家集が影印公開された。『新編私家集大成』（CDROM版）も出版されている。中世私家集研究の基幹資料が出揃った現在、本書の第Ⅱ部は時宜を得てあらかじめ用意されていたかの如くである。様々なヒントが隠れており、啓示を受ける読者も少なくないことと思う。著者は古写本や古記録などを博搜、手堅く証拠を積み上げながらも、しかし断定的な物言いをなるべく避け、きわめて慎重に論を運んでいる。その関心は中世和歌全体に及んでおり、落首・狂歌・道歌・教訓歌なども当然、対象として扱われている。第Ⅱ部第四章「和歌の実用性と文芸性」には、そのような論攷が集められた。和歌と茶道との交流についても、よく目にするような浅薄な文化論とは一線を画し、実隆と紹鷗との師弟の交わりを具体的に跡付ける著者ならではの手法によって史的交渉が丁寧に解き明かされてゆく。和歌を頗る広い範囲で捕らえていた同時代の人々

になりかえり、「トータルとしての和歌が如何なるものであったか、今後とも考えてみたい」と自記する通りなのである。将来、著者による新たな大冊に接する日も、そう遠くはないような気がする。

第三部「歌壇史のこと」は「1 歌壇史研究について」2

歌壇の概観」から成る。「1 歌壇史研究について」は、第一人者の立場からの回顧と展望である。昭和四〇年発表の「冷泉家関係者の記した奥書を持つ歌書類について 付・歌壇史研究について」の付部分など、論攷三編が核となっている。しかし、冷泉家関係の奥書集成の部分は残念ながら今回も未収録となった。思うに、奥書の蒐集時から年月が経過していること、冷泉家の典籍類が未公開の段階での作業だったこと等々が考慮されてであろうが、中世和歌研究者には依然として必備の論文である。書評者も頻繁に参照するのだが、何処かへ紛れてしまうたびに複写を余儀なくされており、悩ましい。「研究者が殆ど手をつけず、奇々怪々たる伝説の荒れ狂うにまかせていた中世和歌の分野を、私は、確実な史的事実を通して歌壇や歌人の実態把握を行う事から、明らかにしよう」と心がけてきた」という著者の発言も、この省かれた部分にあり、惜しまれてならない。他の未収録の論攷、たとえば「東常縁の家集並びに諸著作の考察 附・東家末流著作一覧」「東常縁年譜」などと共に、続刊への収載をお願いしたいものである。

2 歌壇の概観」では、前著が弘安期までのそれであったことを承け、正応から慶長期までの歌壇の流れが実証的に叙述されている。初学者にも親しみやすい中世歌壇史概論であり、学部学生

などはまずここから入って、著者の各大冊や論攷へと進んでいく方法も有効であろう。注意すべき点や今後追究すべき問題にも筆は及んでおり、当該分野に残る諸課題が懇切に示されていることも有益である。末尾に置かれた「付 参考文献」も単なる羅列ではなく、近年の研究動向に言及しつつ部類されており、充実している。

ところで、本書では煩瑣なることを避けてか、著者自身に関わる業績についてはいちいち廻って記していない。例えば「源惠千首」について、昭和三八年の文庫会出品「飛鳥千首」（飛鳥井千首）奥書（著者のメモ）を引き、「正応四年二月の催行となる」と考証の過程を記すが（三二六頁）、このことはすでに「中世歌壇史の研究 南北朝期」で指摘済みであり、前著にも同様の記述が見られる。「南北朝期」の刊行以後、正応四年催行を自明のこととして「源惠千首」に言及した後人の論攷も公にされておられ、地道な業績の先後が不明確にならないか、やや危惧されるところである。それにしても、全国各地に点在する諸本の調査はもちろん、古書即売会でのメモや図録・古書肆の目録に至るまで旺盛な史料博捜は、ゆうに半世紀を超えてなお衰えを知らない。世紀を跨ぎ長く第一線で走り続けていることは、引かれている藤岡作太郎『国文学全史』が05の刊年となっている（二九五頁）ことから窺知できよう（自明のこととはいえ、将来の後学のためには1905とあるべきか）。

中世歌書関係の片々たる資料、未詳の断簡などに、聞き慣れない和歌催事や歌人名を発見し、手がかりを得ようとして各種辞典

類を検してみると、項目すら立っていないことが少なくない。ところが氏の著作類を繙くや忽ちのうちに目指す記述へと辿りつき疑問が氷解した経験は、誰しもが持っているのではないか。かつて歴史分野の古文書調査に同道させられた折、文書中の人名をめぐって中世史研究者の間で取り交わされた「井上氏の本を見れば何か解るかも知れない」という会話を思い出す。「国書人名辞典」でも「和歌大辞典」でも、氏の著書からの引用はおびただしい。こうした定評ある大辞典類の、さらに親辞典ともいうべき性格まで併せ持っているのが、本書を含めた、氏の一連の著作群なのである。

『中世歌壇史の研究』三部作は、それまでの論攷を解体してまとめたものだと言者自身、語っている。これに『平安後期歌人伝

新刊紹介

井上宗雄著

『和歌 典籍 俳句』

浩瀚且つ精密な歌人伝研究で、和歌文学のみならず歴史学にも多大なる影響を及ぼされた井上宗雄氏のエッセイ集。和歌研究を志す者は熟読の上演習に参加のこと、と指導教官より厳命がくだされ慌てて本屋に走ったのがつい二月前のこと、今では書き

の研究」と前者、そして本書を加えた六冊を解体し、さらに未収

録の論攷をも加えて、たとえば『中世歌壇史年表』のような大事典を構想していただけないかと切望している。メモや書き込みも可能なCD-ROM版なら、さらに利便性は増すに違いない。氏の総指揮のもと、若手研究者を実働部隊としたプロジェクトの立ち上げが期待される。実現すれば、和歌研究にとどまらず、人文学の発展に大いに寄与することは多言を要しないであろう。

本書の「あとがき」で氏は、半世紀余の自らの研究は平和の賜であった、と回顧している。俗事に追われ愚痴を並べがちな我が身を省みて、恵まれた時代に生きていることを感謝し着実に歩まなければと、本書を前に自戒の念を禁じ得ないのである。

(二〇〇七年七月 笠間書院 A5判 五一〇頁 税込一四一七五円)

込みと付箋で原型を留めていないが、どこから何度読んでも面白い。

いつから月は秋のものになったのか、歌道家とは何か、歴史資料と文学研究の接点はどこかなど、スリリングな問題提起が多

数提出されている。そうかと思えば、学生時代の思い出、戦地での慨嘆、教育者としての人生、若年時の勉強や古本屋のオヤジについての微笑ましいエピソードがあり、厳密な考証に裏打ちされた研究書とは趣を変えた井上先生の人生もまた垣間見よう

な人間味にも溢れている。文学研究の楽しさを存分味わえながら、その道程で得る小話はまるで微笑ましい。

たとえばこんな話。さる俊英な一年生が俳句会に訪れた折、私語がうるさい。「叱っていたら勲章になった(?) かもしれない」という。その一年生は誰であろう「披露された時の名乗りは、寺山修司」だったそうなの。(二〇〇九年二月 笠間書院 A5判 三八二頁 税込五〇四〇円) [梅田 径]